

Title	「現代思想入門」における近代主義批判によせて
Sub Title	Some notes on Mr. Y. Hamada's critique of modernism in his an introduction to contemporary ideology
Author	田中, 明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.9 (1963. 9) ,p.856(68)- 862(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19630901-0068
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630901-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「現代思想入門」における近代主義批判によせて

田 中 明

浜田氏の新刊書「現代思想入門」は、しばしば難解な迄に鮮明な詩的表現の故ではなく、思想史学の方法にたいする「批判」の鋭さの故に、筆者の関心をひく昨年の論作である。

著者は世界史の上で過渡期を為す現代を、思想の歴史における重大な転機とみなし、資本主義から社会主義への移行に直面する、現代思想の最大の課題を社会主義の概念の把握にあるものとする。然るに現代日本の思想状況を省れば、戦後思想が自らに課した任務は日本思想の近代化ないしは民主化であった。欧米の近代に日本のひよわな近代が敗北したという自覚は、敗戦により明治「維新」に逆戻りした「近代」、日本の徹底的な近代化、しかり西欧的な近代化を戦後思想のあらたな問題意識たらしめる。思想の領域に近代化を求める実践的な意識の過剰に基いて、「近代」日本の精神「構造」に根を下す、日本人の伝統的な思考様式の前近代性、ないしは擬近代的な様式の近代的変革が意図せられた。しかして戦後十数年にお

よぶ思想史研究の成果と課題は、現代の日本の思想の特質を、近代対前近代なる進歩の図式に引き比べ、表面の扮装が近代で裏面は前近代的な二重構造に求め乍ら、ついに近代対前近代という批判の原理を近代の信仰にまでみちびいた。「近代を目標としてその実現に邁進するという優等生的な生真面目さ」で、「近代を学びに学んだその成果は、現在眼前にみられるとおりである。」（浜田「入門」21頁）近代対前近代なる進歩の原理がはらむ危険な論理は、それが近代を規範として前近代を批判する仕方の無批判さを生み残した。近代対前近代という批判の基軸は同時に日本の現実を西欧の理想に對置せしめ、理念としての近代の日本における敗退を後進国民の力量不足の責に帰せしめる。それゆえ浜田は反問している。日本が模範とあおぐ欧米先進における近代の運命はいかなるものぞ、と。現代西欧において近代思想じたいが破産に直面し、近代思想はその中心のカテゴリーの検討を迫られる時、戦後の日本における思想近代化の達成の根本的検討が必要であろう。戦後日本の近代思想の成果を土台に、思想の領域で近代の批判がなされるべきであろう。かように

浜田が近代の思想を批判するのも、戦後思想史におけるその圧倒的影響のゆえである。近代の立場に戦後の思想の特長と欠陥を掴む処に同氏の批判が成り立つ。批判の対象として氏に選ばれた戦後の成果こそは丸山真男の思想史学である。

(1)「……ここでは神島二郎『近代日本の精神構造』（昭和三六年）をみてみよう。……神島の問題意識は、いぜん日本近代の矮小さの探求という、戦後思想史共通の問題意識の流れの中に立っている。その方法としては、近代対前近代の図式を根底にすえて、西欧近代を無批判に規準としながら、日本近代の中の『基層における前近代性』への批判をくだてる。その根本の見地ないし方法は、丸山思想史学の踏襲であるが、丸山では近代思想への深い内面的理解が、近代的原理の駆使を可能にしているのに反して、神島ではその理解が浅く不消化であるため、批判の尺度としての近代の有効性をいぢじるしくそこねている。そこに神島における丸山の矮小化があると同時に、丸山の欠陥が大写しにされているのである。」（浜田義文「現代思想入門」68頁）この引用から同書の丸山思想史学批判の大意は察知されうるであろう。

「入門」の著者は、現代思想の当面の課題が近代思想の批判と克服にあるものとみて、戦後日本の思想変革、もしくは思想近代化の戦後的達成をしめす、丸山史学の近代主義を批判の対象にするの

「現代思想入門」における近代主義批判によせて

である。批判の方法は、丸山の思想の積極面の継承とその内在的な批判にあるものとされる。すなわち同氏の指摘によれば、戦後の思想変革を思想固有の問題としてとらえ、思想自体の内的構造と論理に即して内から遂行しようとした、丸山のユニークな業績は、国民感情の底に根を張る旧い思考様式、ないしは精神構造を根底から転覆する「精神の革命」であった。精神の革命は体制の変革に依拠せずと成る者ではない。「政治経済の問題に思想問題を従属させること」は、「思想固有の問題をのがし、思想の自己変革をゆるがせにすることになる。」（浜田「入門」35頁）思想変革の事業は政治経済の変化を、思想の自己変革のための内的条件に転化せしめる、内面的な活動の主体性に依存し、思想領域で思想自体の論理と構造に依拠して展開されるべきである。まさしく戦後の起点において、丸山は思想の近代化と云う独自の課題を自覚的に捉え、終始一貫して戦後日本の思想近代化に指導的役割をはたした。思想の近代化は戦後的な課題でもあるが、近代化の視点そのものは百年來の歴史のうちに戦前の物語をひめる。「日本政治思想史研究」の論作において丸山が、「近代の超克」の嵐に抗し「近代の擁護」に立つ時、同氏の封建批判は戦時の時局批判をなした。しかるに「現代政治の思想と行動」において、戦後の丸山は「擁護」の視点を「近代」の批判にきりかえし、外からと上からの「民主化政策」に「思想近代化」の課題を対置したのである。これこそ浜田の評価によれば、丸山史学による近代の探究が戦後思想の最高の成果と看做される所以である。戦時の丸山が「擁護」の苦闘なくしては、戦後の丸山における「近代の

批判」もないであろう。戦時戦後の「問題意識のズレ」にも拘らず、二つの視角を支える丸山の立場は同一である。丸山真男の思想史学が前提するのは理念としての近代の信奉にほかならない。そこから思想史の方法論のうちに、近代対前近代の進歩の図式が思想の座標として持ち込まれる。近代対前近代の図式の難点は、批判の原理となる近代の信仰にある、とみる浜田の論議により、批判の基軸としての近代の原理が、丸山の思想において批判の対象に選ばれた訳である。

(2) 「…弁解が許されるならば、中国の停滞性ということとは当時の第一線に立つ中国史家の間に多少とも共通した問題意識であった。私もそれに随いながら、何故中国は近代化に失敗して半植民地化され、日本は明治維新によって東洋唯一かつ最初の近代国家になったかという課題を思想史の面から追求していったのである。この『近代国家』がカッポ付の近代であったことも今日——その具体的性格についてはなお区々に見解が分れるが——まず学会の共有財産になっているといえよう。カッポ付の近代を経験した日本と、それが成功しなかった中国とにおいて、大衆的地盤での近代化という点では、今日まさに逆の対比が生れつつある。この複雑な歴史の弁証法のかにおいてこそ、『何故日本は東洋最初の近代国家の樹立に成功したか』という設問は改めて検討し直されなければならない。」（『日本政治思想史研究』あとがき七七八頁。）

三

丸山による日本ファシズム批判はその告白というべきであろう。またしても日本ファシズム批判の基準がヨーロッパの典型なのである。丸山はヨーロッパ・ファシズムの範型に、近代の原理の具現のみをみてその破産をみようとしなない。丸山が西欧の近代を基準にとるのも、西欧の先進に近代の典型をみるがゆえであろう。「日本の特殊近代の彼方に西欧の純粹普通の近代が」想定せられる。丸山のばあい、西欧近代からの偏差値で日本近代の特殊性がはかられる。しかるに浜田の批判によれば、「特殊性の彼岸に純粹の普遍性があるのではない。」（同書80頁）普遍的近代が特殊の近代を貫いてそこに在るとすれば、日本「近代」への批判は同時に世界史的な近代の批判なのである。

(3) グルー米國大使の日本人観を引用した後に丸山は述べる。「つまりこれが自己の行動の意味と結果をどこまでも自覚しつつ遂行するナチ指導者と、自己の現実の行動が絶えず主観的意図を裏切っていく我が軍國指導者との対比にはかならない。どちらにも罪の意識はない。しかし一方は罪の意識に真向から挑戦することによってそれに打克とうとするのに対して、他方は自己の行動を絶えず倫理化することによってそれを回避しようとする。メフィストフェレスとまさに逆に『善を欲してしかもつねに悪を為』したのが日本の支配権力であった。どちらが一層始末が悪いかは容易に断じられない。ただ間違いなくいえることは一方はヨリ強い精神であり一方はヨリ弱い精神だということである。弱い精神が強い精神に感染するのは思えば当然であった。」（丸山真男「軍國支配者の精神形態」〔同

「現代思想入門」における近代主義批判によせて

「現代思想入門」の丸山史学批判は、いまや近代対前近代という、方法的基軸にむけられる。すなわち「入門」の論述によれば、近代の諸原理による前近代の批判は、理念対現実の対立であると同時に、西欧対日本の対立をしめす丸山の思想把握の基本図式であるといわれる。どうじに思想の図式としては、近代対前近代の対置した「作為」対「自然」に置換されうる。近代の「する」原理による前近代「である」型社会の批判と否定は、西欧的近代人の「作為」を通じての東洋的「自然」観の破壊に導かれる。東洋的な「自然」観に同情的な「現代」人はいうであろう。「近代人の虚無感、近代以降ふくらみにふくらんだ人間の尊大の必然の結末である」と。「人間の自然の発露としてのみ、人間は自然を支配することができるのであり、またそうしなければならぬ。」（浜田「入門」133、134頁。）丸山は近代の能動性の一面に心酔してその客観的な根拠を見落している。丸山史学は作為の概念を近代思想の核心と看做し、近代の立場に敢て自らの批判の基準を重ね合わせ、西欧近代の「強い精神」の側から前近代的な「弱い精神」を捉えて、「近代」日本の帝國を支配した「主体」意識の欠如を指摘する。日本近代への批判に問題があるのではなく、典型的近代への信奉に問題があるのである。欧米の典型的近代に日本の後進的近代が敗北した事実から、戦後思想は思想近代化の問題意識を支配的観点にすえた。近代化の完遂のためには不可欠の過程ともみえた、近代の諸原理による前近代の批判からは、近代の諸原理にたいする無条件の信奉がうまれて、思想近代化に指導的役割を担う丸山史学も近代主義に終るのである。

「現代政治の思想と行動」上巻93（94頁。）

四

「最後に、マルクスのイギリスに対する関係を思いおこそう。」そこに「入門」の合鍵がある。問題の焦点は典型の概念にしぼられてきたのである。〔Über die Verbindung der Begriffe〕⁽⁴⁾というドイツ人に対する警告の中に、それが端的に示されている。（浜田「入門」85、86頁。）浜田はマルクスの典型イギリス批判に着目し、「典型」の概念において「二重」の批判をつかむ。すなわち浜田の理解によれば、マルクスは典型の批判において自国の近代を、後進国の惨めさを踏まえて先進国の近代を批判することができた。「自国の近代についてとくべつ多くの苦しみをもつことは、その苦しみをまぬかれていくようにみえる欧米よりも、必ずしも不幸であるとはいえない。」（同書83頁。）浜田は二重の批判を日本の近代のうえに適用している。たとえば「近代」日本の前「近代」性をとろう。これこそ帝國主義の競争場裡において、「後進」日本が欧米「先進」に対して自らを保つ可く、余りにも急速度な上からの近代化をとおして、自己の近代にひきいれざるをえぬ封建の遺制なのである。それをしも近代の表面に裏面は封建とよぶなら、その矛盾した構造じたいが後進「近代」の「二重」構造であろう。かつこの後進近代の構造は世界的な規模における、帝國主義國家と植民地從屬國の關係の縮図であるとみられる。帝國主義國家の文明と植民地從屬國の野蛮とはおなじ矛盾の表裏であるから、「野蛮が文明そのものもう一つの顔

にはかならない。(82頁。)かくして浜田の評価によれば、はやくも明治の一代において、あるいは福沢の生涯において、近代の「文明」と「野蛮」の関係は、「福沢の思惑をこえて、逆転の徴候をみせる。」(230頁。)西欧近代の文明の立場が東洋封建の野蛮に対する地位を變じた。「先なる者」と「後なる者」との関係には變化の兆しが現れる。「近代の文明は進歩の極点において、かえって野蛮に転化しなければならなかった。」(232頁。)いまや歴史は福沢のとる、野蛮↓文明の直線的進歩史観では捉え得ない処へ来たのであるが、すでに思想も丸山のたつ、日本↓欧米の歴史的单線主義では捉え得ない処に

来たのであった。「欧米には近代についてのまだなほどかの樂觀がありうる時、日本にはそれはありえようもない。」(88頁。)
「そこに、私たちは自分のみじめさを逆手にとって相手への真の優位をきずくことができる。そのときこそ後なる者が先に、先なる者が後になるときであろう。」(84頁。)

(4) 「物理学者は自然の諸過程をば、それらが最も含蓄ある形態で、かつ攪乱的な諸影響によつては殆んどかき乱されることなく、現象するところで観察するか、さもなければ彼は、もし可能ならば、過程の純粋な経過を保証するような諸条件のもとで実験をする。私がこの著作で研究せねばならぬものは資本制的生産様式、および、これに照応する生産、ならびに交易諸関係である。それらの行われている典型的な場所は今日までではイギリスである。これ、イギリスが、私の理論的展開の主要な例証として役だつ所以である。だが、もしドイツの読者にして、イギリスの工業および農業労働者の状

目標が見えたらなくて困っている、ということではない。」(浜田「入門」94頁。)

(一) 第二の論点は、「精神の革命」が未完の事業であるとして、その思想近代化の積極的成果をば、いかに把握するかという問題である。戦後日本の思想変革、ないしは思想近代化の否定的側面としては、丸山史学の近代主義が、「日本の思想」における前近代性、もしくは「近代の思想」を克服し得ぬ点が指摘せられた。それゆえ前段の論結どおりに、「日本の思想」が「近代の思想」に留まる限りは、「近代の擁護」と「近代」の批判に、悪戦苦闘した丸山史学の未完の成果が継承され発展せしめらるべきである。しかるに浜田の論理によれば、継承はあらゆる場合に否定をかい潜るとき可能となるから、「近代」の批判も近代の否定を通じて行われ、近代を克服せんがためには「近代」が批判されるべきである。すなわち浜田の言葉によれば、「日本近代が小さくみじめであるとしたら、……それをテコにしてすすんで欧米近代をも批判しなければならぬ。」(同書38頁。)とはいえ「近代の批判」において、「近代」の超克⁽⁵⁾がなされるならば、「内在」的な批判も外在的な「批判」にかわるのである。

(5) 引用の箇所は正しくは次の様に読まれる。「丸山は、昭和二五年ころの文章の中で、日本における近代的自主的人間の確立が、『西欧社会と比べて相対的に』左の集団の推進力を通じて進行する。『現代政治の思想と行動』上巻207頁。」といっているが、これは面白い。これは大体丸山の指摘したとおり実際にも進化した。とこ

「現代思想入門」における近代主義批判によせて

態について偽善的に眉をひそめるか、あるいは、ドイツでは事態はまだまだそんなに悪くなっていないということである。楽天的に安堵するならば、私は彼にこう叫びかけねばならぬ、——ひと事ではないのだぞ!」(K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 6. 長谷部訳。)

五

他人の思想を自分の言葉に訳し乍ら、自分の意見を他人の語法でのべる、思想史特有の煩雑な作業にしばし別れを告げて、以上の論述にかんし論点の整理をしたい。

(一) 論点の第一は、「精神の革命」を成功とみるか、失敗とみるか、思想近代化の社会的成果をいかにつかむかということにある。ところで浜田の意見によれば、それは失敗である、か、または未完である。そこで「日本の思想」の批判の原理をなす、近代の思想が批判の対象にかえられる。浜田の立場からは批判の対象をなす、丸山史学の近代主義は、「日本の思想」の解釈の道具にすぎず、「近代の思想」の変革の武器ではない、戦後日本の近代思想の最高の成果であることとなる。それゆえ浜田の論議において、思想近代化の達成の根本的検討が要求せられるとすれば、いわゆる思想の近代化は社会的な規模において、思想の変革をも近代の思想をも齎らし得ない、近代の立場よりする「精神の革命」であると論決されるも同然であろう。丸山真男の近代思想を、戦後思想の最高の成果とみる浜田の評価からは、戦後日本の思想変革が、目標を達成しえたと云い得ぬ事は明かである。「それは、すでに目標が達成されて、次の新

ろがまさにそのことによつて今日では、『左の集団』が目的喪失に悩んでいる。それは、すでに目標が達成されて、次の新目標が見えたらなくて困っている、ということではない。今日なおそれが未達成であるからといって、近代的自主的個人を新しい人間のイメージとしてかけつづけるならば、破れ障子のようになっているところからすきま風が吹きこんで、とうてい目標とはなりえぬほどにそれは傷つきゆらいでいる、ということなのである。」(浜田義文「現代思想入門」94頁。)

結 語

もしも人あって、思想近代化の内在的批判に主要な関心を注ぐならば、彼が「近代」の批判を顧みず、「近代の批判」に赴く事はないであろう。しかして福沢の思想に近代の完結をみとめ、文明の信奉ゆえの福沢の錯誤のみに就いて語る、福沢研究の近代批判は、丸山史学の近代主義の裏返された踏襲である。かりにも「近代の批判」が「近代」の批判をつうじ、かつまた批判的分析は内在的批判において果されうる者とすれば、福沢の「批判」もそれが「近代」の批判において、福沢の思想の内在的論理にそくして行わる可きであった。しかるに近來の論作をみれば、この点に關する唯一の寄与も、「現代」的な立場よりする進歩派の著作にはなく、むしろこれをば、「反動」的な文学者の労作に負う事が銘記されねばならぬ。たとえ朝日新聞紙上において作家海音寺氏が説くところを看よ。「……論吉における武士気質は何人も否定することはできないで

あろう。
数年前のこと、若手の歴史学者たちとの座談会の席で、諭吉の話が出、議論が……『瘡我慢の説』のことにおよんだ時、歴史学者たちは

『諭吉の限界である』

と言った。

ほくにはその意味がよくわからなかった。

『諭吉という人はそういう人ですよ』

とだけ言ったが、その人たちと話す意欲を急速に失って、あとは口をつぐんだ。

前に触れたように、ほくには諭吉の思想、諭吉の言説を活力あらしめたのは、諭吉のこの気質、この精神にあるとしか思われない……(海音寺潮五郎「武士気質」(3)(37年10月9日朝日新聞所載「日本再発見」48。))海音寺氏の所説を確認すべく福沢の言説についてみることにしよう。彼は其の説に云う。

「……勝氏は予め必敗を期し、其未だ実際に敗れざるに先んじて自から自家の大権を投棄し、只管平和を買はんとて勉めたる者なれば、兵乱の爲めに人を殺し財を散ずるの禍をば軽くしたりと雖も、立国の要素たる瘡我慢の士風を傷ふたるの責は免る可らず。殺人散財は

一時の禍にして、士風の維持は万世の要なり。此を典して彼を買ふ、其功罪相償ふや否や……権りに和議を講じて円滑に事を纏めたるは、唯その時の兵禍を恐れて人民を塗炭に救はんが爲めのみなれども、本来立国の要は瘡我慢の一義に在り、況んや今後敵国外患の変なきを期す可らざるに於てをや。斯る大切の場合に臨んでは兵禍は恐るゝに足らず、天下後世国を立て、外に交はらんとする者は、努々吾維新の挙動を学んで権道に就く可らず……」(福沢諭吉「瘡我慢の説」[同選集第七巻。])これによって福沢の維新にかんする評価の一面をみるならば、日本近代の大思想家にあつてもブルジョア革命に対する批判の試みが、東洋思想の影響のもとに前近代性の擁護において自己を貫徹し、「近代」の思想の弱い環を露呈していた事実が指摘される。「近代の立場」が批判される彼の島もかかる地点を措いて他にはないのである。

〔付記〕 本稿は原来が書評の様式で書かれた後に、編集の都合から這樣の研究ノートに書きあらためた者である。異常に遅筆な筆者の立場からすれば、枚数の不足はにわかに補い難く展開を後日に譲り度い。

書評

守田志郎著

『地主経済と地方資本』

(古島敏雄監修・近代土地制度史研究叢書・第六巻)

高山隆三

一

日本資本主義の生成と展開において、その過程を規定し、特徴づけ、農地改革によって解体を遂げる地主的土地所有の性格と機能・形態は、生産力水準・生産力構造に規定され、段階的・地帯的差をもつ。本書は、日本農業の地帯構成において「一極」をなす、「東北新潟の千町歩地土地地帯」の中、新潟を分析対象に据え、北蒲原郡・中蒲原郡で千町歩(I家)、五百町歩(F家)、三十町歩(M家)を所有していた各地主の史料に拠って、千町歩地土地地帯の地主制の展開とそれが内包する矛盾、そして地主の性格を、諸資本との関連の仕方から解明を試みたものといえよう。守田氏はその課題を土地所有者、小作米販売者、貨幣蓄積者である地主の諸経済機能の、日本資本主義発展過程における働き方・地方経済との関連の仕方を詳細に分析することによって明らかにしようとしたのであり、そ

のことは、従来の「地主銀行」・「商人地主」概念を再検討することであった。それにより、銀行資本、商業資本の独自性が明確に把握されることとなり、地主の本質規定も亦、明らかにされることとなる。すなわち地主経済機能の諸側面、諸過程の分析に本書の特質をみる事ができるといえよう。

そこで、本書の篇別構成を示し、各章の内容を辿りながら、本書の意義を考えてみたい。

先ず本書の篇別構成は左の如くである。

- 第一章 千町歩地主の成立と展開
 - 第一節 地主的土地所有の地域性
 - 第二節 千町歩地主I家の成長過程
 - 第三節 千町歩地主I家の大成
- 第二章 地方銀行と地主制
 - 第一節 国立銀行の性格
 - 第二節 第四銀行の成長と地主制
 - 第三節 銀行系列と諸銀行
 - 第四節 銀行と商業圏
- 第三章 地主の企業投資
 - 第一節 地方企業の様相
 - 第二節 銀行および企業投資の様相
 - 第三節 地主の投資
 - 第四節 地主投資と地方資本
- 第四章 米商人と地主